

【実践報告】

教育実習Ⅴ・Ⅵ（中・高）の報告

広島文教大学教育学部

教育学科 教授 黒木 晶子 教授 笹原 豊造 准教授 猪川 優子

1 はじめに

教育実習Ⅴ・Ⅵは中学校・高等学校教員としての適性を確認し、その資質を伸長するために行われるものである。大学で学んだ理論と教育現場での実践がどのように関連するかを実習で学ぶ。実習校で指導担当教諭の指導のもと、授業参観、教材研究、授業実施、学級指導等を行う。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前学修 (学内)	4月～5月	・本実習の意義、目的、心構え等を再確認する。 ・実習校への事前訪問により、指導担当教諭等の指導担当者に、担当となる学級の生徒の実態や、指導計画、担当授業の内容を確認する。 ・教材研究、模擬授業を行う。担当教員による指導、実習生相互の検討作業を通して、よりよい教材・授業になるよう工夫を重ねる。
本実習 15日間 (学外)	5月～6月 (今年度は 8月～10月 にも実施。)	・実習の内容は実習校により計画される。主な内容として、①指導担当教諭等からのオリエンテーション、②授業参観、③教材研究、④授業担当、⑤生徒指導、⑥その他の学校・学級運営に関わる諸業務が挙げられる。 ・実習中は教育実習日誌等の記録をつけ、中学校・高等学校教員の役割・業務等について理解を深める。
事後学修 (学内)	7月 (今年度は 12月に実施。)	・各自の実習を振り返り、報告書をまとめる。 ・各自の実習内容について報告会で報告する。報告会では、教科指導、生徒指導、校務等を通して学んだことを発表する。

3 活動の概要

○教育実習を通して学んだこと（学生の報告会資料より抜粋）

・今回の実習で多くの先生方とお話をすることができた。生徒との関わり方は様々で、生徒によっても異なるが、生徒理解をするために積極的に話しかけることや、生活メモや授業ノートなどを通じたコミュニケーションも大切だということを学んだ。先生方は様々な業務の中で日々生徒達のことを考えておられ、教員間のコミュニケーションも生徒理解においてとても重要だと感じた。教科担当制であることから一人の生徒を複数の教員が見ることができるため、教員も個々の様々な面を知ることができるという部分が中学校の良さであると思った。授業については教材研究と授業改善の重要性を感じた。私自身教材を読む力に課題を感じたため、教材研究を行う際にその作品が伝えたいこと、学ばせたいことをしっかり読み取る力を付けていきたい。また、授業後の先生方からの助言を参考に、授業を改善することで生徒の反応や考えの深まりが大きく変わった。

生徒からも授業の感想を聞くことができたことも、よりよい授業を考える力になった。自己の課題と向き合い、3週間で得たことを生かしながらこれからも学び続けたい。

- ・実習を終えて一番印象に残っていることは、生徒の成長を願い、いつでも生徒のことを考えておられる先生の姿である。コロナ禍で長い期間休校になり、生徒が大きく成長するきっかけにもなる行事等、多くの学びの機会が失われた。しかし、その限られた時間の中で、多くの体験をし、経験を得ることができるように、先生方は目標をもって生徒指導をされていた。成長してほしいことを明確にした上で生徒指導を行うことは、指導の軸になるため、何が必要かしっかりと考え、生徒にあった適切な指導ができると思う。教師として働くときは、活動を行う前に、生徒や児童にどのような力をつけさせたいかなど目標をもって、指導を行っていききたい。
- ・3週間という短い期間で、生徒との関わり方や授業づくり、教師の心構え等多くのことを学ぶことができた実習となった。中学生は心身ともに大きく成長する時期であり、生徒一人ひとりが多くの葛藤をもっている。そのような時期だからこそ、生徒の成長した姿を見たときの感動はとて大きいものである。だからこそ、心身ともに成長する時期を見守り、支えていくことができるのが中学校教員の魅力なのではないかと思った。小学校と中学校、校種は違うが、多面的・多角的に子どもの様子を観察し、子どものことを第一に考え、動くことは変わらない。この実習で出会った先生方のように、これから教職人生を歩んでいく中で、子どものことを考えて動き、そして自分自身も子どもとともに成長していくことができる教員を目指して、頑張っていきたいと思う。

4 成果と課題

当実習は、大学での学び（理論）と現場での学び（実践）をつなぐものであり、教育法Ⅰ～Ⅳを学修してきた学生たちにとって集大成としての意味をもつものであった。すでに前年度小学校での本実習を終えている実習生も多く、その場合、小学校と中学校との相違点や共通点を実感する場でもあった。今年度は、コロナ禍の中、例年とは異なる状況に直面しながらも、実習をとおして学生たちが多くの学びを得ている様子が、巡回指導でうかがえた。

教科の指導に関しては、教材研究の重要性を改めて認識した実習生が多かった。授業を実施するには、深い教材理解と多角的な教材分析が必要である。このことを強く実感しながら、授業実施に向けて懸命に準備を行っていた。

生徒指導や校務に関しては、現場の教員の多忙さを実感した実習生が多かった。また、教員間で生徒の情報を共有することや見通しをもって仕事をすることの重要性、教員としての達成感、教員であることの責任感を実習の中で感じ取っており、様々な角度から教員の仕事を捉えることとなった。

実習報告会は、今年度の状況をふまえてオンラインでの実施となったが、例年通りユニバーサルパスポートや授業等を通じて他学年の学生にも周知し、多くの学生の参加があった。特に3年生の積極的な参加が見られ、活発な質疑応答が行われた。

今後の課題としては、実習に向けた取り組みのさらなる充実が挙げられる。教材研究や模擬授業等、実習を視野に入れた学修をすすめていきたい。また、今後さらに実習報告会への1～2年生の参加を促し、実習に向けた系統的学修の充実を図りたい。